

エイズの表象

木村 功

一九九九年四月一日、「感染症予防法」が施行され、HIV（ヒト免疫不全ウイルス）感染者・エイズ患者・人権保護団体の批判の対象であった「後天性免疫不全症候群の予防に関する法律」（通称「エイズ予防法」）は、成立以来一〇年でその姿を消した。その背景には、AZTやプロテアーゼ阻害剤などの治療薬の開発によってHIV感染者のエイズ発症が抑制され、一九九八年よりHIV感染による免疫機能障害が身体障害者認定の対象疾患となった現状がある。日本のエイズをめぐる医学的・社会的環境は、転換期を迎えたといえよう。

本論では、一九八一年のCDC（アメリカ国立防疫センター）による最初の症例報告以来、恐怖によって全世界を瞬く間に席巻したエイズという感染症とその表象について、日本の現代文学テクストを中心に考察する。なお、紙数の関係から、一九八六年から一九九三年の間に発表された三つのテクストを対象とした。

—

エイズを直接的なテーマに取り上げた現代文学のテクストとしては、島田雅彦の「未確認尾行物体」（「文学界」、一九八六年一月）が上げられる。島田は翌一九八七年には、「ビデオ・アイコン」（「海燕」、一月）、「エイズ友の会」（「新潮」、一月）、「ウィルスの奇蹟」（「文学界」、六月）と、エイズ四部作を発表し、加筆訂正の同年一〇月『未確認尾行物体』（文芸春秋、のち一九九三年七月文春文庫）の一冊にまとめている。以下本論では、四部作すべてを対象に考察を加えていく。

「未確認尾行物体」が発表された一九八六年一月、長野県松本市で松本エイズパニックが発生した。すでに一九八五年三月に第四回エイズ調査検討委員会（翌年エイズサーベイランス委員会と改称）で、エイズ患者第一号が認定され、同年五月には血友病患者のHIV感染者第一号が認定されていた。しかし、これらのエイズ患者・HIV感染者は、ホモセクシュアル（ゲイ）・血友病患者という点でそれぞれ性的・遺伝的にステイグマを刻みつけられたマイノリティーズであり、当時の日本人の多くは対岸の火事としてしか認識することがなかった。松本エイズパニックは、そのような状況を一変させることになる。フィリピンから出稼ぎ

にきて風俗店で働いて帰国した女性からHIV陽性の結果が検出され、それをマスコミが実名報道したことにより、日本人社会がHIVに感染した外国人によってエイズの脅威にさらされたことと認識されたのである。翌一九八七年一月一七日には、神戸市で日本人女性のエイズ患者が初めて確認されたという厚生省の報告によって神戸パニックが発生し、「エイズ元年」（塩川優一・エイズサーベイランス委員会委員長・当時）と位置づけられることになった。ここにHIV・エイズは、ホモセクシュアル（ゲイ）・血友病患者・外国人を表象とする病気ではなく、国籍・人種・性差を問わず誰でも罹患する可能性がある病気として認知されることになったのである。

このことと関連して、一九八七年には、エイズ文学待望論（一）なるものが唱えられた。例えば三田誠広は、

病気と文学とは、深いつながりがある。死に至る病を背負った人間には、高みから世界を見下ろす特権が与えられている。病気が、そうでなければ思想（これも一種の病気かもしれないが）によって、自分が特殊な人間であることを自覚したヒーローが、小説の中で大活躍することになる。

マルクス主義のような思想が衰退し、結核が克服されたいまは、小説のヒーローが登場しにくい時代だが、新たな病原菌の発生によって、新たなヒーローが誕生することになるかもしれない。

として、エイズによって、文学は、おのずと大きな変容を迫られることになる。と述べている（二）。一連のエイズパニックと三田の発言は、共にエイズという感染症に対する強い不安と恐怖に裏打ちされている。治療法のない新しい感染症の登場に対する恐怖が、エイズに過剰な意味を与えて、特権化するのである。島田の「未確認尾行物体」に始まる一連の試みは、偶然とはいえこのような日本社会のエイズをめぐる恐慌とリンクしていたのであった。

「未確認尾行物体」は、皇太子の御学友である笹川賢一が、ルチアーノを名乗るおカマ、高円修にストーカーキングされ、アイデンティティ・クライシスに直面する物語である。エイズを発症したルチアーノは余命わずか一年と診断されており、ストーカーと化したルチアーノによって笹川夫婦の私生活の秘密は暴かれ、互いの浮気が露見した結果笹川夫婦の関係は破綻する。さらに笹川は、職場である産婦人科でもルチアーノとの交際を噂され苦境に陥るのである。ルチアーノは、記憶を介して笹川の体へ乗り移り、共同生活を妄想するのであるが、

このことはレトロウイルスであるHIVが正常なDNAに自分のDNA情報をコピーし自分を増殖させていくことで個体の免疫系を破壊していくという、HIVの感染・発症モデルとまさに照応している。この意味でルチャアーノは、彼の生活や論理、性格を全てナンセンスなものに変えてしまふルチャアーノというエイズ、すなわち人間と等身大のエイズ・ウイルス（エイズ友の会）と化すのである。なぜルチャアーノにおいて、エイズであることが、生活や論理、性格を全てナンセンスなものに変えてしまふことが、接合するのであるうか。人間化したエイズであるルチャアーノについては、以下のように紹介されている。

彼は女性の恋人やホモセクシアルとの交際を媒介にして、自分の中の何かが変容してゆくを感じた。ほかでもない自分がここにいるという感覚を彼は味わったことはなかったが、自分の体が何かに置き換えられる感覚は味わうことができた。それは、自分が男であるという前提がぐらつくことも意味した。何も男性にとどまっている必要はない、もつと自由に、節操もなく、何かになり変わってしまったおつと思つたのだつた。そして、とりあえず、おカマという形式を採用したのである。（「未確認尾行物体」）

ルチャアーノは、他者を媒介にして自分の男性ジェンダーを、おカマという境界へ位置づけ直したのである。こうしてルチャアーノは、ヘテロセクシアルティを構造化しジェンダー化していく人間の社会化過程そのものを異化し、ジェンダー・アイデンティティを解体してしまふ。一九八七年当時、エイズの社会的意味を説いた浅田彰も、エイズが同性愛者のようなマージナルな存在を排除したり特権化したりするためのレッテルとして機能していることを批判し、エイズがあらゆるアイデンティティを解体する病であることを指摘していた。

実際それ（エイズの世紀末病としてのイメージ——木村注）は、同性愛者をはじめとするマージナルな存在にレッテルを貼り排除するための、新たな手段となつているのだ。また不思議なことに、同性愛者の側も、自らの特権性を確認するための聖痕としてすんでそれを受け入れることがある。（中略）こうした排除と特権化の身振りほどAIDSにふさわしからぬものは、しかし実をいうと存在しない。むしろ、AIDSとは、根本的には免疫のメカニズムにほかならない排除と特権化のメカニズムを無効にし、それによって形成され維持されるはずだったアイデンティティ——「正常な社会」のそれであれ「パリア」のそれであれ——を根底から解体してしまふような何ものかなのである。

言い換えれば、AIDSは、確固たる輪郭をもつた主体というフィクションを掘り崩し、そのような輪郭は、さまざまな物質や生物を含む流れのなかに、免疫系の効果として、震える線で描かれているものでしかないことを裏側から照らし出してしまつたのだ（3）。かくしてルチャアーノは、ジェンダー・アイデンティティの境界に位置するおカマであることに加えて、浅田が指摘するアイデンティティの虚構性を露呈させるエイズを発症したことで、従来日本人が確固として保有し続けてきたセクシアルティやアイデンティティの觀念を相対化し、むしろその制度性や抑圧性を可視化するばかりでなく、無効化してしまつたのである。生活や論理、性格を全てナンセンスなものに変えてしまふと述べられる所以はここにある。事実ルチャアーノは、秩序と美徳の世界（「未確認尾行物体」）の住人である笹川に向かつて、例えば以下のように発言するのである。

（前略）ああ、エイズつて素敵だね。あたしと先生の愛を妨げる障害を全て取り払つてしまつたものだ。この世にはいろんな人がいるわ。金持ちも貧乏人も、サディストもマゾヒストも、詐欺師も放火魔も、皇族もおカマも、黒人も白人も黄色い人も赤い人も……みんながエイズにかかれば、同じことよ。今はまだ患者が少ないから差別されているだけですわ。先生、もつあたしから逃げる必要はないんです。同じ種族になつたんですから（同、傍線引用者）

経済格差・セクシアルティ・社会的地位の格差・人種などのアイデンティティがエイズによって均質化され無効化されてしまつたディカルな世界像が、ルチャアーノによって示されている。笹川に代表される、秩序と美徳の世界のアイデンティティは、ルチャアーノという境界的存在によって揺さぶられ、ナンセンスなものへと解体していくことになるのである。図式的ではあるが、ここに階層社会化した日本社会の諸制度や秩序を解体し、カオスを出現させようとする作家のストラテジーを指摘することが出来るだろう。

そして物語は、そのルチャアーノに噛み付かれてHIVに感染させられた笹川が（4）、自分の体の中に忍び込んだルチャアーノというエイズを解読しながら、それを一つの間人観にまで一般化する（「エイズ友の会」）ことを、次の問題系として設定している。それはエイズによって露呈させられたアイデンティティの危機を、如何に解決していくかという命題に収斂していくのである。以下は、笹川がみた夢の内容である。

ビニール風船の中の人間……これが私たちが今まで馴れ合ってきた人間の姿だ。

ところが、ビートル風船を針で突いて、パチンとやってみたらどうだろう。私を私たらしめている価値観やら免疫系やらは外に向って開き切ってしまう。自分の意識と他人の意識、自分の体と自然の境界が消え、自由に通行できるようになる。もはや、世界と自分の間の距離が消滅し、世界も笹川氏も一緒にたなあって、休みなくクルクル回り出すのだ。……そういう場所に新しい人間が住んでいるのではないだろうか？（「ウィルスの奇蹟」 傍線引用者）

複合体（同）である人間を包み込んできた風船（秩序）を破裂させ、自他の境界や差異を開放・消滅させていくことによって新たな世界像、名づけようのない自分と出会う（同）というのである。こうして笹川は、エイズ友の会の山室大悟に「進化」を認められ、「大きな意志に目覚めた」（同）存在として評価され、エイズを病む人間の多いアフリカへ旅立つことになる。閉じられた秩序の世界から、自分と世界の境界を消滅させ、自由に通行が出来る開放的狀態に移行することとは、ナンセンスの世界の出現を意味しており、それこそは前述したルチャアーノが夢見た、全ての差異・意味が消滅した無秩序の世界そのものである。こうして笹川と他者——ルチャアーノの境界がエイズによって開放され融合したことで、新しい人間、像と世界観が読者の前に提出されたように見える。

ところがエイズは、秩序／アイデンティティを常に無意味化していくことによつて、逆に秩序／アイデンティティの輪郭を炙り出し再定義し活性化していくのである。例えばエルヴェ・ギベールは、以下のように述べる。

たしかに、このおそろしい病気には、なんとなく甘美なもの、魅惑的なものがある。もちろん、いたましい病気ではあるけれど、急死することはないのだ。確実に死にいたる途中で踊り場やひどく長い階段があり、階段の一段一段は死への類のない見習い期間であった。死ぬ時間をあたえてくれ、死人に生きる時間をあたえてくれる病気、時間を発見し、ついには生を発見する時間をあたえてくれる病気だった。アフリカミドリザルが広めた、いわば現代の天才的な発明である。（中略）生が死の予感でしかなく、いつやってくるかわからない死にたえずびくびくしているとすれば、潜伏期間の六年間と、さらにAZTによつて最高二年、AZTがなくなると数カ月生きられるという期限を保証してくれるエイズは、ぼくたちを生にたいして十分自覺的な人間にし、無知から解放してくれるのだ。ワクチンで不治の宣告が見えなければ、ぼくはまた以前の無知の状態にもどるだろう。エイズのせい、ぼくの人生は大きく飛躍すること

ができたのである（5）。

ギベールはエイズを、生の意味を発見させ、患者の生を大きく飛躍させる実存的な病として提示する。ただし、エイズが死の自覚によつて患者の生の質を高めるという意味づけが、ギベールの場合は瀕死の病床で自殺を試みるような過酷な病苦を伴い安易な特権化を防いでいるのに対して、「未確認移行物体」——笹川の場合は、テクストから病苦を捨象することでエイズの聖化に単純に接続してしまう。浅田彰は、（前略）とくに文学や思想の問題として考えるときは、エイズという病気があるからアイデンティティを固めなすといふんじゃなくて、逆にエイズが示してみせたアイデンティティというものの虚構性・脆弱性をどこまで引き受けられるか、自らに問わなきゃいけないと思ふんです。エイズの時代にあつて、どこまで自己を外に露出できるか。と述べ、自己露出ばかりが他人との関係も全て露出したギベールを「アモラルに見えて非常に倫理的な姿勢がある」（6）と評価した。この意味で「未確認移行物体」は、エイズによる「新しい人間」像を読者に提示することで共生への道を示唆しながらも、笹川が「エイズによつて生活の一切の拠りどころを失った者はエイズを唯一の拠りどころにするしかない。（「ウィルスの奇蹟」と述べることで、エイズそれ自体を新たなアイデンティティとして聖別してしまい、自己のアイデンティティを外部へ開放する作業を中断してしまつたといえるだろう（7）。

いまだ完全な治療法のないエイズを、特別な病気として「世紀末の病」（8）といふような過剰な意味を付与し表象することは、一感染症であるエイズに対する冷静で現実的な認識や態度の障害となり、HIV感染者・エイズ患者を疎外し抑圧することに結びつく不適切な認識方法であることはいつまでもない。それと同様に、「未確認移行物体」において認められたHIV感染者やエイズ患者に「進化」のような意味を与えて聖別し表象することも、エイズがアイデンティティに投げかけた虚構性・脆弱性の問題を対象化することを途絶させる不徹底な姿勢であつた。

二

大江健三郎の未来小説である『治療塔』（一九九〇年五月）四日、岩波書店。初出名「再会、あるいはラスト・ピース」「へるめす」一九八九年七月—一九九〇年

三月)は、核戦争・原発事故・環境破壊で荒廃した未来の地球において、選ばれた人たちが新しい地球に移住する。大出発の後、再び地球に帰還してきた一〇年後が物語の舞台となっている。移住先で発見した治療塔によって改造された新しい人となった。選ばれた人達は、支配者として地球の社会を再編成しようとするが、選ばれた人、胡ちゃんはその抵抗し、その姿を胡ちゃんの子を身ごもった残留者リツコが物語るのである。エイズは、その中で、新しい癌、ともに荒廃した地球を席巻する代表的な病として登場する。

——いまさっきの話をした理由のひとつはね、胡ちゃん、私をひどいめに会わせたヨーロッパの空港の裏フロア・カー連中にね、エイズ持ちが居たかも知れないからなの。みんな私の口のなかにもアレして、それを飲みこまないと殴りつけたからね。私はエイズに感染している可能性があるよ。日本に帰った直後、発熱したことも覚えているし。……私がね、胡ちゃんにコンドームをつけてもらった理由は、まずそういうことなのよ。

(中略)

——胡ちゃんは、古い地球の人間が、この十年、エイズについてどういう態度をとってきたか知らないでしょう。……いったん検査網に捕まって感染を摘発されたらば、上衣がシャツの胸に「エイズ・マーク」をつけることが義務化されているのよ。第二次世界大戦前のドイツのユダヤ人のように、腕頸にいれず、みさせる法案まで通過しそだったんだから。(七)

高橋敏夫はエイズの表象に関する考察で、島田の「未確認尾行物体」に比して「治療塔」の後退を指摘し、その理由として「裏フロア・カー」というイメージや、「ヨーロッパ」という日本の「外」から持ち込まれたという見方、そして、エイズにたいする人々の差別意識と権力による徹底した管理等が示されながら、それらは物語のなかで放置されてしまっただけである。エイズをめぐる常識的な「暗さ」が物語のなかにとりこまれるだけではなく、「暗さ」のまま放置されるという物語の暗さによっていつそ暗いものになっている、といえようか。常識が常識として物語のなかで固定されたといいかえてもよい。と、テキストがエイズの「暗さ」を再生産するにとどまる。エイズの物語的再固定化(9)を問題視した。しかしこのテキストに認められるのは、エイズをめぐる常識の再固定化以上の問題である。

例えば大江の描き出した、警察官の詰め所があるエイズ検査所などは、エイズの軍事的な隠喩を指摘したスーザン・ソントグが、それよりも危険視した(前略)権威主義的な支配をたくみに正当化するだけでなく、裏でこっそりと、国家のヒモつきの抑圧と暴力の必要性を示唆したりする。公共の福祉の医学的モデル(三)が、警察権力を伴って具現化されたものといえる。しかもそれは、キューバにおいて実現されているエイズへの隔離政策(三)に鑑みる時、決して想像の世界の出来事ではないリアリティを伴って現実のHIV感染者・エイズ患者を抑圧することになる。のみならず検査網に掛かったHIV感染者を公衆衛生のためにエイズ・マークで可視化して差別的に構造化していく未来社会のイメージは、エイズが感染症の一つであるという認知に欠けている。すなわちここにはHIV感染が治療可能になっていく可能性が見落とされ、未来社会においてエイズは国家権力によって公衆衛生の名の下に隔離され抑圧されるべき恐怖の病として積極的に表象されてしまっているのである。「治療塔」の問題は、高橋の指摘するような物語におけるエイズ常識の再固定化というだけでは不十分であり、公衆衛生の名の下に国家が積極的に感染者を析出し抑圧を加える現実のモデルとその管理体制を追認する想像力に無批判に接続していることや、一感染症を未来社会においても国家権力の抑圧の対象とすべき恐怖の病として固定しようとする志向が認められる点にあるのである。

「治療塔」が内包する問題は、国家／公衆衛生との関係において認められるだけではない。個人のレベルでも「治療塔」で描かれたエイズ患者の被差別的状況を、語り手のリツコが追認していく叙述に、それが確認できる。

そして私はひとつの決心をしたのだ。すぐにもエイズの検査を受けること、もし自分がキャリアであったとするなら、上衣にエイズ・マークをつけることなどなんでもない。(七)

エイズが差別的な指標であることを踏まえた上で示されるこの発言を、現在のHIV感染者・エイズ患者の読者たちは、どう受けとめるだろうか。HIV感染者・エイズ患者がエイズ・マークをつけさせられるという有徴化は、彼らを医療対象者としての感染症患者ではなく公衆衛生上隔離されるべき存在と見做し、社会的差別のコンテキストの中に位置つけることを意味している。そのことによって引き起こされる悲劇の具体例を、例えば明治四〇年以降ハンセン氏病患者を対象に行われた隔離政策や断種の歴史に求めることができるだろう。しかし、それ

にも拘らず、キャリアである以上は、エイズマークをつけることなどなんでもないといい切るリッコには、差別され人権を侵害される存在となることへの恐怖や苦痛や怒りへの想像力が明らかに欠如している。ましてや、そのリッコは結局感染していなかったわけであるから、その言葉は無責任極まる放言として、HIV感染者・エイズ患者はもちろんホモセクシユアル（ゲイ）の読者に対して直接的な抑圧を加えることになるのである（12）。

さらに「治療塔」には、HIVを脅迫の手段に使う人物も登場してくる。

——（前略）われわれが報告を受けている例に、こいつもものもありました。誓約書を出す、出さないの前の時点で、帰還者の子供を妊娠した、というわけです。当然にね、該当する女性のエイズ検査が行なわれます。帰還者への感染問題がありますから。ところがね、これはエイズ検査所の管理のズサンさによるもので早急に改められねばならない事態ですが、検査用の血液採取の際一度使った注射針がまぎれ込んでいて、そのために妊婦がエイズ・ウイルスに感染しました。検査直後に高熱を発したという報告があつて、ある期間をおいて再検査したところ、陽性でね。これは国家の法律ですから、もう母体が危険なほどでしたが、中絶手術を行なうほかなかった。そういうことがありましたよ。あくまでも、あつてはならぬ事故ですけどもね。（一六）

帰還者と残留者の通婚を禁じる帰還者側の策謀のなかで、エイズ検査の名の下に意図的に残留者の妊婦がHIVに感染させられ、その上危険な状況にも拘らず中絶手術を受けさせられるというグロテスク極まる「事故」の顛末が語られる。

脅迫するのは朔ちゃんの実父であり、脅迫されるのは息子（の朔ちゃんとリッコ）の手である。ここではまず、HIVに感染している以上は中絶させるといふ発想に、典型的な優生思想の表出が確認できる。このHIV感染者の子孫は残さないという優生思想も現在の感覚からはとうてい受け入れがたいものだが、同等に問題なのは帰還者「権力者側がエイズの脅威を逆手にとつて、HIVを脅迫・暴力の手段に用いていることである。エイズが有する、治療方法すら見出せない病であるという恐怖が、見えない暴力の支配システムである権力に構造化されることで、支配体制を強化するための最強・最悪の生物兵器として機能しうる可能性が、ここに示唆されている（13）。

ここにおいて、エイズをめぐる負の表象はほとんど出揃った感がある。「治療塔」においてエイズは、近未来の社会においても治療法の見出せない恐怖の病と

して固定され、それゆえ国家が公衆衛生の名の下に管理すべき性感染症であり、HIV感染者・エイズ患者は隔離され抑圧を加えられるべき対象として表象される。こうして権力者の支配システムに構造化されたエイズは、一方で脅迫・暴力装置として機能することで権力者の支配力を表象することにもなる。暴力が恐怖をコントロールすることで、エイズと権力支配の共犯関係が成立するのである。このようなエイズの表象が、当時のエイズ報道に接した作家の恐怖に根ざした想像力の関数であることはいうまでもない。「治療塔」は、エイズを恐怖・抑圧・暴力によって表象することで、未来世界から現在のHIV感染者・エイズ患者・ホモセクシユアル（ゲイ）の読者を、生物的な死ではなく社会的な死への恐怖によって抑圧し、非感染者との共生を阻害することになる。

現実社会でも「治療塔」発表に先立つ一九八九年三月二七日、HIV・エイズの蔓延防止と公衆衛生向上の目的から、後天性免疫不全症候群の予防に関する法律（通称「エイズ予防法」）が施行された。HIV・エイズを法的に囲い込もうとする行政側と、感染者・患者のプライバシーへの配慮を欠いた「エイズ予防法」の差別的な方向性を問題視する感染者・患者・支持者側の対立の構図が鮮明になつて行くのである。その一方で、同年、医師・厚生省・製薬会社によって発生した薬害エイズ事件の被害者によるHIV訴訟が、大阪と東京でそれぞれ提訴されたことも看過できない（一九九六年三月和解）。それは被害者側からの、社会的認知による共生を求める行為であった。

三

瀬戸内寂聴の「愛死」は、一九九三年一月四日から九四年九月五日まで「読売新聞」に掲載され、一月に単行本にまとめられた（読売新聞社刊。のち一九九七年一月講談社文庫）。この「愛死」では、HIV感染ルート中の三つのルート、すなわちホモセクシユアル（ゲイ）のエイズ、ヘテロセクシユアルのエイズ、薬害エイズ（血友病患者）が取り上げられている。具体的には、ゲイの青年亮の恋人でありエイズで死亡した巴咲、不倫の結果HIVに感染した主婦原彰子、血液製剤でHIVに感染させられた血友病患者の高校生祐二である。サンダー・ギルマンは、黒人でゲイのエイズ患者に、エイズとともに生きる者を社会から疎外された者にした最初の類型化（14）を指摘しているが、作家が提示したこれらの

感染ルートも、社会から疎外された者と重なっていることに注目したい。すなわち「愛死」のHIV感染者・エイズ患者も、それぞれが性的マイノリティーであるホモセクシュアル（ゲイ）であり、一夫一婦の夫婦関係を遵守する道徳律から逸脱した主婦であり、血友病という遺伝性疾患をもつ患者なのである。彼らは異性愛・貞淑・健常といった一般社会が「標準」視してしまつた属性から逸脱したり疎外されたりした存在であることから、HIV・エイズと結びつけられて表象されている。

そして「愛死」において、この社会から疎外された者でHIV感染者でもある人々に対する差別的な視線が、ロマンチックなイメージに転倒していくのはわずかに一歩を隔てるに過ぎない。実際、登場人物の一人彰子はエイズ患者の平野について、もしよ、もし、あの人がエイズにかなければ、どんな生活をしていたかしらと考えたの、とても変だけど、もし健常だったら普通の人じゃないかしら。（中略）……でもあの人はエイズという悪魔にとりつかれて、そのおかげで、何かしら神聖なものになつてしまった。（第三章、傍線引用者）と述べるのである。彰子において、エイズ患者の聖化は明らかである。

また彰子はシリル・コラルの映画「野性の夜」を観ても、以下のような感想を述べる。

地の涯てる所 海の始まる際にひとり立つたジャン。その顔が昇る朝日とローラへの愛で和み やがて訪れる確実なエイズ死よりも、今、生きている命の瞬間の輝きを信じようとする切ない希望で、聖化され、それはブッダがキリストのように後光を放つて見えたのを彰子は思い出す。（中略）

「生きていることは愛することだ」と、映画を通してシリル・コラルは叫んでいる。性は生、生は死であり、命がけの愛による死が至上のエロティシズムになる。（同、傍線引用者）

エイズという悪魔にとりつかれたエイズ患者は、ブッダ・キリストに並置され、聖なる受難者として聖別されることで至上の価値を体現する。そして聖化されたエイズによって性・生・死が圧縮された 命がけの愛 を経た死こそが、至上のエロティシズムを析出すると語られるのである。この叙述から、エロティシズムをロマンチックに特権化するためにエイズが利用されていることが指摘できるだろう。

この彰子はエイズ検査を受け、陽性の結果を得たことから、夫の前から姿

を隠す。不倫の結果HIVに感染したという事実を、夫に告白できないからである。しかし、「私が夫に告白出来て、そこから新しい愛が生れるなんてことはあり得ないことだし、私たち夫婦にとっては、エイズは破局で、地獄行きよ」（第五章）と語られる夫婦間の危機は、夫婦愛の復活へと接続していく展開を見せる。夫が脳卒中を起こし危篤状態に陥つたという連絡を受けて、彰子は病室へ駆けつけ回心するのである。

健常者の世界から逃げることはか考えていなかった。積極的に生きるより消極的な逃避の生活に逃げこむことしか考えられなかった。命の尽きる日まで病氣と闘う努力をつづけようと、エイズと共存して延命をはかるなど考えてもみなかった。だからこそ自殺することが念頭から離れたことはなかったのだ。（中略）

もつこれからは、自分の余命と、昌平の余命との根比べだと思つて、彰子は思いがけない勇気が体の奥から湧き上ってくるのを感じた。（第二〇章）

こうしてHIV感染をきっかけに、彰子は自らの来し方を省み自分の内面の問題を直視することで、危機に瀕した自分の生命と夫婦関係を再構築し、エイズと共存する可能性を導き出していくのである。この意味でHIV感染は、エルヴェ・ギベールが説く生の実存的認識と危機を経た夫婦愛の復活を、劇的かつロマンチックに演出するために物語中に装置されたものであったといえよう。

そしてこの夫婦愛の復活劇の演出効果を高めるために、HIV感染こそは不倫という 悪業 に対する 神仏からの罰 であるという仏教的な解釈が、彰子自身によって示される。

エイズ（正しくはHIV——木村注）に感染した時、彰子は真先に罰が当たったのだと思つた。罰をあてられるだけの悪業を自分にはしていると認めていた。それなら、そのことを見通していて罰をあてた「もの」は何なのか。その資格があるのは昌平しかない筈だ。けれども彰子が感染した時、昌平は妻の裏切りを知らなかったのだ。

やつぱりそれは神仏からの罰なのだろうか。

自分のような悪業の覚えのあるものが罰を当てられるのはつなずける。けれども血友病の人がアメリカの血液製剤でエイズに感染させられたのはどういう神仏のからくりなのか。エイズのキャリアと知らない母が産んだ赤ん坊が胎内から感染して生れてくるのは、何の因果なのか。（中略）

昔の人はハンセン氏病を伝染病と知らず**業病**と呼んでいた。エイズも一部の人はそう思っているし、隔離さえ出ている。家族に見捨てられた昔のハンセン氏病患者のように、自分も帰るあてもない巡礼の旅にでも出るべきなのだろうか。(第七章、傍線引用者)

神仏からの罰・因果・業病 という彰子の言葉からは、エイズがセックスを介した 性¹⁵⁾交通の病¹⁶⁾い(15)ではなく、神仏のような彼岸の絶対者から不倫という 悪業 や前世の因縁に対して与えられる処罰、言い換えれば倫理の病として捉えられていることが分かる。もともと作家は彰子の担当医である三沢友里子に、「あのね、エイズは単なる病気のひとつにすぎないのよ。決して何かの罰だとか報いとかではないんですよ。ウィルスによって感染した病気です。」(第一〇章)と語らせて、彰子のエイズ認識に釘をさすことを忘れてはいない。しかし、告知以前に医学的なカウンセリングを十分受けたにもかかわらず、HIV感染を不倫という 悪業 の 因果 とする彰子の仏教的解釈が延々と語られることには、HIV感染を含む性感染症を恐れぬ乱交的な性行動に対する作家の倫理観が反映していることを指摘しないわけにはいかないだろう(16)。スーザン・ソングが、エイズは長期にわたる一夫一婦的なセックス以外のすべてをデタラメな(したがって危険な)もの、また逸脱的なものとしてしまつたのである。(17)と指摘しているように、一旦は彰子の不倫とHIV感染によって危機に瀕した夫婦関係が再構築されていく「愛死」のプロットには、逆説的にはあるが、エイズを介して一夫一婦的夫婦関係・性関係を安全な関係として再発見し強化していくとするモチーフが認められるのである。そして彰子が述べるような仏教的イデオロギーは、HIV感染として結果するリスクな乱交的性交渉を 悪業 と見做し、HIV感染を 罰 と位置づけていくのであるから、エイズが示す一夫一婦的夫婦関係・性関係の再評価の方向性をさらに補強する役割を果たしているといえる。

しかもこの仏教的イデオロギーの導入は、業病 隔離 という言葉を介してハンセン氏病に接続していくことで、エイズにハンセン氏病とその患者が負わされてきた苦衷に満ちた歴史的表象を継承させてしまつことになる。ハンセン氏病と同一視されたエイズは、業病 隔離、そして 巡礼の旅 といった古来の差別的表象の下に抑圧されることで、聖化・ロマン化に加えて悲劇性をも獲得する

のである。このことによって性感染症であるエイズを、エイズブローパーとして「いま・ここ」において認識することは著しく困難となる。それはエイズという病と共生するための現実的認識を著しく阻害することを意味している。

「愛死」において、当初エイズは愛と愛に関わる行為を、至上のエロティシズムへと聖化・ロマン化させるものであり、次に個人の生の意味を実存的に認識させ一夫一婦的夫婦関係・性関係を再発見し称揚するためのロマンチックなイデオロギー装置と化していた。そして仏教的イデオロギーは、エイズと連繫することで、一夫一婦的な夫婦関係・性関係を再評価をさらに強化するのである。同時にこの仏教的イデオロギーは、性感染症にすぎないエイズにハンセン氏病の歴史的表象を継承させエイズを悲劇的なものへ転移させてしまつ。「愛死」におけるこれらのエイズをめぐる一連の表象は、エイズと共生するための現実的な認識を著しく阻害する危険性を胚胎しているのである。

四

日本の現代文学におけるエイズは、ホモセクシュアル(ゲイ)、不倫行為者のような日本社会の中で有徴化されて析出されるグループや、血友病患者を専らその表象としている。「エイズ元年」以来異性愛間での感染が早くから認められるにも関わらず、特にホモセクシュアル(ゲイ)がエイズを表象することについては、異性愛者の側がエイズによる「汚染」(サンダー・ギルマン)の境界を乱交的でリスクな性行動をとるホモセクシュアル(ゲイ)に設定して、「こちら側」と「向こう側」を区別し、ホモセクシュアル(ゲイ)を「向こう側」へ追いやることで感染の恐怖から心理的に遠ざかるうとした結果に他ならない(18)。「愛死」の彰子がHIVに感染したことで自ら「向こう側」の人間になつたのは、彼女にもそのような差別意識が内面化されており、それを自分に適用した結果である。同質性を重んじる日本社会は、社会的異分子との境界の線引きをすることで、絶えず非異分子としての自分たちを析出し保持しようとしているわけである。

このような差別意識は、単にエイズに関する知識を獲得することによって改善されるものではない。本論が考察対象としたテクストの年代的上限である「愛死」が発表された一九九三年、宗像恒次は 調査結果で分かつたことは、エイズウィルス感染者だというだけで、その人は慎重でない人 危険な人 思慮深くない人、

誠実でない人、愉快でない人、あるいは非常に自己主張をする人というようなマイナスのイメージを持つている人が多いことである。特に、男性同性愛者に対しては、人格イメージがより悪くなる傾向がある。(25)と報告し、HIV感染者・エイズ患者との交流を欠いたところで、情報だけでエイズのイメージを産出していく日本人の問題点を指摘していた。

この一九九三年は、HIV・エイズに関する報道が爆発的に増加した一九九二年と連絡している(26)。小説以外でエイズを対象化した当時のメディアには、新聞・雑誌やTV・ラジオ・映画・演劇・広告などが上げられるが(27)、例えばTVに関しては、血液製剤でHIVに感染した人を中学生が訪問し、インタビューを通してその知見を改める過程をNHKの「中学生日記」(一九九三年七月一日放映)が描き出している。ここに素朴な啓蒙主義を見出すことは容易だが、実在の感染者と直接交わることでHIV・エイズを自分と同じ人間が直面した問題として理解し、日常生活のレベルで、共感体験をつむ(28)ことの重要性を示したことは大きな意義があった。言い換えれば、それはHIV・エイズを抱える実在の人々を理解し共感することで、HIV・エイズを「こちら側」に組み込み共生への通路を拓く姿勢を示していたのである。このことは翻って現代文学が、実在するHIV感染者・エイズ患者の人々に対して、果たしてどれだけ共感や共生を意識していたかという問いかけに反転していくであろう。

すなわち、病苦や差別や不安を抱えた一個一個の実在する人間の問題としてよりも、現在話題性のあるHIV・エイズをテキストの素材として抽象化して組み込むことで物語の活性化を図り、その結果HIV・エイズのイメージだけを無責任に再生産したり歪曲させたりすることでHIV感染者・エイズ患者の権利を損なうような、非共生的な姿勢の問題が起ちあがってくるのである。大江健三郎の「治療塔」は、HIV・エイズを未来社会においても恐怖の病と見做すことで「向こう側」へ排除し続ける姿勢を示し、瀬戸内寂聴の「愛死」でも、「こちら側」の「夫」夫婦関係の再評価をロマンチックかつ逆説的に演出するためにエイズが利用され、その過程では非劇性を演出するためにハンセン氏病の表象まで継承させられていた。島田雅彦のみはエイズが顕在化させたアイデンティティの虚構性・脆弱さを「こちら側」も共有する問題点として提示していたのだが、エイズそのものを「新しい人間のアイデンティティ」として再提示することで、結局「向こう側」へエイズを聖別してしまった。考察してきた文学テキストは、抑圧・口

マン化・聖別などを通してエイズを「向こう側」の物語として析出し、「こちら側」の既存システムを保持するためのイデオロギー装置として機能したにとどまったといえるだろう(29)。そこにはHIV・エイズを「こちら側」に組み込むための共感も共生への姿勢も欠落していたのである。

現在エイズについては、新たな文明秩序の必要性を示唆するものだという見解が提出されている。

エイズはHIV感染者一人一人が正しい知識をもって自らの感染状況を知り、他の人に感染させなければ広まらない病気である。感染は正しい知識の欠如とどこかで自分の命をなげだしたり、人の命のことを考えないところで拡大しているのである。また一人一人が感染リスクのある行為を避けるための自己主張と自信をもてば、広まらない病気でもある。(中略)換言すれば自らの判断を正しいと信じていることができ、人の命を守り、人の役に立ち、人の心や魂を共感できること、またそんな自分の成長に喜びを感じられるような個人がつくりだす社会ならば、エイズは予防できる病気である。エイズは今、そうした新たな文明秩序の必要性を示唆しているように思える。(34)

ここでエイズは、HIV感染者やエイズ患者は勿論非感染者においても、自律や他者への共感・共生への姿勢をはかる試金石として語られている。エイズとは、それに関わる人々の心のレベルを可視化させる病といえよう。

現在日本国内におけるエイズ治療は、AZT、3TCとインジナビルまたはリトナビルの三剤併用療法により、HIVパージの患者でウイルス量が検出限界以下に減少し、CD4陽性T細胞数の増加も確認できるといつ(35)。端的にいえばエイズは、HIVに感染しても発症することなく一生をおくることができ慢性疾患になったのである。しかしエイズによる死が遠のいたといっても、HIV感染者・エイズ患者への偏見・差別を生む文化的社会的土壌に何ら変化は生じていない。また一九九九年のエイズ動向委員会の報告が示しているように、HIV感染者は過去最高の数値を示し(36)、エイズは確実に日常生活に浸透して来ている。ところがそのような危機的状況にも拘らず、エイズへの危機感が国民全体で稀薄化しているという逆転現象が生じている。性行動の盛んな青年層への重点的なエイズ教育が必須とされる所以である。生殖―再生産が種の存続に必要な行為である以上、エイズは、性という交通を介して常に人類の現在と将来に関わり続ける病なのであり、その認識のもとにエイズ教育への取り組みをあらためて意

識しなければならない。文学・文学研究においても、エイズを共感をもって「こちら側」に組み込み、個人レベルで常に正面から対峙しつづける共生の姿勢が重要なのであり、そのことによってのみエイズをめぐる表象は、その効力を失つのである。

注

- (1) 高橋敏夫「エイズをめぐる物語・性・国家」『国文学』一九九九年一月一日。
- (2) 「時代の変化と文学」『東京新聞』（夕刊）、一九八七年五月七日。ほかにも、エイズに文字の回生のきっかけを認めて、エイズ文学の隆盛を期待する。とした運命論者（『大波小波』『東京新聞』（夕刊）一九八七年二月六日）の発言がある。これらの発言は、すでに高橋敏夫によっても紹介されている。
- (3) 浅田彰「AIDSの/AIDSによる脱構築」島田雅彦『未確認尾行物体』一九八七年一〇月五日、文芸春秋。一八三、一八四頁。同様の意味づけは、すでに広く言われていることだが、エイズはわれわれの免疫システムすなわち自分以外のものを識別排除して、自分が自分であることを保持するシステムそのものを破壊するからである。つまりアイデンティティーそのものが崩壊する。肉体的な現象でありながら、精神的な領域に、あまりに見事に直結するのである。（日野啓三「エイズの奥にあるもの」『新潮』一九八八年二月一日）という見解にも継承されている。
- (4) 実は笹川のHIV感染は、妻からの感染である。その事実が物語にもたらす意味については、石川巧の論考（『未確認尾行物体』——AIDSのイントロピット』『国文学』第四四九号、一九九九年七月）に詳しい。
- (5) エルウェ・ギベール『僕の命を救ってくれなかった友へ』一九九二年四月五日、集英社。一七七、一七八頁。
- (6) 浅田彰・瀬戸内寂聴・中沢新一「エイズと文学 人間の尊厳をめぐる」『シンポジウム』「すばる」一九九四年七月。
- (7) キース・ビンセントは、言い換えれば、エイズという病気は人間や国家のアイデンティティを疑問に付しているからこそ、個人や人種の免疫システムを発動させ、そのアイデンティティを強化してしまつたのである。したがっ

て、エイズという病気は「主体」を危くしていると同時にそれを形成してもいる。（『現代思想』第二四巻第九号、一九九六年八月）と述べる。

- (8) 波平恵美子は、「世紀末の病」という表現には「二〇世紀の末になって出現した」という意味のほかに、これこそ人類の繁栄に終止符を打つことになる病気であるというニュアンスがある。（『AIDSとエイズ』『エイズの文化人類学』一九八七年八月五日、JICC出版局。のち『病と死の文化』一九九〇年一月二〇日、朝日新聞社、一六四頁。）と指摘している。

(9) (1)と同じ。

- (10) スーザン・ソントグ『隠喩としての病 エイズとその隠喩』一九九二年一〇月二八日、みすず書房、二七〇頁。

(11) キューバは、エイズに対する公共衛生的アプローチを実施しており、国民全員がエイズ検査を受け陽性反応が出た感染者は特別施設へ強制的に入所させられる。感染者は行動が制限され、完全な治療ができるまで生涯拘束される（宗像恒次『エイズの常識』一九九三年一月二〇日、講談社現代新書、九、一〇頁参照）。

- (12) ジョン・ホウィットティア・トリートは、数日後リッコは検査結果を見にセンターへ戻る。陰性であることが判明する。その日検査された二人を除く誰も同じように、一人の外国人女性と海外を旅行した日本人男性、リッコは気分良く家に帰る。（中略）ノリッコより不運な受検者のことはこれ以上書かれていない。私が想像するに、横柄な人は強く印象づけられ、死ぬまでエイズ警察に苦しめられるよう運命づけられている。（『日本のエイズ・パニックと私の年度休暇』『現代思想』第二五巻六号、一九九七年五月）と、HIV感染者が、横柄な人と表象されることを指摘している。また、東南アジアから出稼ぎにきている少女だけが陽性を示したことが物語られるこの場面で、HIVを表象するのは外国人なのであり、ここにもHIV・エイズを外部からの侵入者として想定する典型的事例が確認できる。

(13) エイズの起源をめぐる諸説の中には、ゼーガル夫妻の唱える、HIVは一九七七年米国国防省フォート・デトリック研究所で開発された生物兵器であり、その中心人物こそがロバート・ギャロ（HIVの発見者）であったというものがある（ミルコ・D・グルメク『エイズの歴史』一九九三年一月二〇日、藤原書店、二六二～二六三頁、四四四頁参照）。現在この説は否定さ

れているが、軍暴力・権力とエイズの結びつきやすさを示す一例である。

- (14) サンダー・ギルマン『性』の表紙 一九九七年一月三十一日 青土社 四九二頁下。

- (15) 赤坂憲雄「エイズにおける境界と交通」『エイズの文化人類学』一九八七年八月 五日、JICC出版局 九一頁。

- (16) 柳美里も ひとが生殖と切り離されて性の快楽に狂奔しなければ、エイズはこれほどまでには蔓延しなかったであろうね。ホモセクシャルの方々も含みますけれど。しかしだからといって、エイズが人類に性のモラルを喚起させるために出現したとは思えませんよね。性行為によるエイズ感染（正しくはHIV感染——木村注）は単に快楽には死が付きものだという事実を確認させたに過ぎないような気がします。（中略）快楽はやっぱりあったこと。（『柳美里の「自殺」』一九九五年六月三日、河出書房新社 一一四、一一五頁）と述べ、性行為による快楽追求がエイズ死をもたらすという図式を描いて、瀬戸内同様快楽重視の乱交状態を問題視している。

- (17) (10) に同じ。一三七頁。

- (18) サンダー・ギルマンの、烙印は汚染の境界線を明確に示し、汚染の危険を同性愛者（および新たに烙印を押されている他の集団）に限定すること、異性愛者の社会が性病の蔓延に対していまだく感染の恐怖を封じこめたのである。という指摘に基づく。前掲書（14） 四九一頁下。

- (19) (11) に同じ。一五五頁。

- (20) 例えば「朝日新聞」の場合で見ると、エイズに言及した報道件数は一九八五年に八八件、八六年は九〇件程度であった。神戸のエイズパニックが発生した八七年に二六八件に跳ね上がり、以降八八年二〇五件、八九年一〇二件、九〇年一一一件、九一年二三件と一応沈静化の傾向を示す。ところが翌九二年には五九九件と爆発的な増加を示した。続く九三年も五五一件である。これは九二年から始まったエイズキャンペーンによるところが大きい。

- (21) 一九九三年当時の各メディアのエイズにかかわるコンテンツには、以下のようなものがあつた。映画では、「野性の夜に」（シリル・コラール監督）、「地球の子」（榎坪尋鶴子監督）、「フィラデルフィア」（ジョナサン・デミ監督）。TVでは、「命支えて ママ、パパはエイズなの？」（TBS系

一〇月～一月）、ラジオでは、「サマーフォーラム エイズ世代の僕と私に出来る事」（TBSラジオ、八月三日）。演劇では、茅野明「冬の銀河」（二月五日、九州キリスト教センター）。音楽では、コリアーノ「エイズ交響曲」（八月二七日、サントリーホール）。エイズ・ポスター展（六月二八日～七月二日、中部クリエーターズクラブ）も開かれた。また、エイズを利用したとして国際的に物議をかもしたベネトン社の新聞広告（九月一日各紙）もあった。

- (22) 宗像恒次・森田眞子・藤澤和美『日本のエイズ』一九九四年八月一〇日 明石書店、一一四頁。

- (23) (1) で高橋は、物語による常識の固定化、いいかえれば常識に物語が加担するといった事態は、新たなジャンルとしての「エイズ文学」を不可能にしている。と述べている。

- (24) 宗像恒次「現代文明とエイズ」酒井シヅ編『疫病の時代』一九九九年二月一〇日、大修館書店 三七、三八頁。

- (25) 国立大学保健管理施設協議会エイズ特別委員会編・発行「HIV感染ハンドブック99」一九九九年三月一五日、一九頁。ただし、三剤併用療法は味覚障害や末梢神経をおかされたりするなどの副作用を伴う。

- (26) 昨年一年間に確認されたHIV（エイズウイルス）感染者は前年比六九人増の四九一人、エイズ患者が同五八人増の二八九人と、いずれも過去最高となったことが二五日、厚生省のエイズ動向委員会（委員長・柳川洋埼玉県立大教授）のまとめ（速報値）で明らかになった。非加熱血液製剤で感染・発病した被害者も含め、国内のエイズ患者・感染者はこれで六四一四人となった。このうち、すでに二一五五人が死亡した。（『毎日新聞』二〇〇一年一月二十五日）

【付記】

本文の引用は、島田雅彦「未確認尾行物体」（一九八七年一〇月二五日、文芸春秋）、「大江健三郎『治療塔』」（一九九〇年五月一四日、岩波書店）、瀬戸内寂聴「愛死」上・下巻（一九九四年二月二二日、講談社）による。